

8 地獄のバラッド

「ついに今日 あの^あ人からの便りが届いた
ああ 思いがけない嬉しいお便り」
女は嬉し泣きの涙をぬぐって
深^あ紅い封を切った

「恋人よ もはやこの世での万策尽きた
天国で結ばれる望みも無し 吊いの鐘が
二人の結婚の鐘 そして二人の初夜の炉端は
玉石敷き詰めた地獄の床」

5

顔から血の気が引いて
目は青白い蠟燭の光を放った
脅えた様子で辺りを見回し
齒を食いしばって読み進んだ

10

「出獄すること叶わず
ここで 日一日と朽ちてゆくばかり
忌み嫌うあの従妹のブランシュとの結婚を
うんと言わない限り

15

「鋭く研いだ短剣で 真夜中に
自分は命を絶つ ほかに手は無い
わが愛する女神よ 今夜地獄で会ってくれ
たとえ何があろうとも」

20

顔青ざめて 女は高笑いした
黄金のベルトを巻き
宝石をちりばめた象牙の扇を手に
色鮮やかな祈禱書に 跪いた

それから立ち上がって 「わたし どうかしたのかしら」
扇をたたきつけ 黄金のベルトをはずし
代わりに 革のベルトを巻いて
短剣を脇に差した

25

部屋で震えながら
家中が寝静まるのを待った 30
怯むこと無く死を見つめた
契りを守るために二人は罪を犯すのだ

やがて 夜の垣根と木立の脇を
身を屈め ^{かが} 這うようにして出ていった
バラの茂みが魅惑的な香りを放ち 35
幸せな思い出を蘇らせた

女は倒れ しばらくじっとしていた
悲嘆にくれて草地を搔いた ^か
夜露に濡れた草が顔に触れて我に帰り
立ち上がると 裾をからげて駆け出した 40

月が現れ じっと下界を見下ろしはじめると
女は 姿を見られた夜明けの亡霊のように驚いて
人気の無い道を横切り ^{ひとけ}
夜風にざわめく森の中に飛び込んだ

枝が なびく着物に引っかかり 45
森の生きものが 鋭い叫び声をあげた
女は立ち止まらず 逢い引きの檜の木めざして急いだ
それは 女が通い慣れた道だった

ためらいも無く胸を開け ^{はだ}
短剣をぐさりと突き刺し 倒れた 50
まるでひと休みするように横たわり
死んで 地獄で目を覚ました

魂は炎につつまれて
女は地獄の真ん中に坐った
女の耳に 四方から 55
死者たちの悲しい呻きが聞こえてきた

堂々として背が高く真っ黒い悪魔が
突然 女の側に姿を現した
「わたくしは マレスピーナ坊ちゃまの花嫁です
あの方はもうお越しでしょうか」 60

「わが愛し霊よ ^{いと} ^こ ようこそ そなたの寝床へ」

「マレスピーナ様はいらしてますか」
「とんでもない ^{あした} 明日あの男は
^{いとこ} 従妹のブランシュと結婚するはず」

「うそよ あの方は今夜わたしと一緒に死にました」 65
「違う あれは計りごと」 「いいえ そんな」
「^{いとこ} 愛し霊よ うそではない」
「わたしたちは真夜中に死んだのです あの方とわたしは」

悪魔は去った ^い 呻きを抑え
思いの丈を激しい祈りに込めて 70
女は地獄の真ん中に身を沈め
じっと男を待った

泣き叫ぶ声 不気味な騒めきの中で
女はつとめて気を鎮めた
地獄の円蓋を充たす血染めの炎が 75
臭いも無く音も無く 女をつつんだ

どのくらい長くそうしていたか
ついに男の裏切りを悟ると
女は 地獄の床を横切って行った
^{ぐんりょう} 群霊は皆 立ち上がって女を見つめた 80

^{くだん} 件の悪魔が 地獄の淵で女を引き止めた
女は悪魔を振り払って 「寄らないで」
「^{いとこ} 愛し霊よ 気でも狂ったか」
「騙されたのよ もうここに用はないわ」

のたうつ混沌の海を横切って女は走った 85
世にも不思議な光景だった
地獄の ^{ぐんりょう} 群霊は黙して 一人の男の到来を待った
巨大な深淵が二人を隔ててゆく

女には それは美しい牧場のようだった
花々が一斉に足元に咲きはじめた 90
女は天国に入り 階段を上って
神の御座に ^{ぎよざ ひざまず} 跪いた

^{してんし} 熾天使や聖者たちが声を合わせて
恐れを知らないその魂を迎えた

女の魂が喜ぶ^{さま}様子に驚いて

95

地獄が一^{いっせい}齊に 半ば人間のしゃがれ声で喝采した

(山中光義訳)